



日天 (胎藏界曼荼羅)

機深
浅随

聖人
葉投

日々好日

時待
人待

賢者
説黙

日々好日

六八三号

(令和八年一月発行)

国会審議の中で宰相がつい口をすべらせた一言、「そんなことより」が少なからず物議をかもしている。それは甲と乙の何れが重要な課題として総理の心中にあるかを窺うに足る一言であった。

それは政治と金の問題と衆議院の定数削減の何れを優先して扱うかということであり、総理の心中は与党に組した日本維新の会の意を優先したいということなのです。

人は長い人生の中で、何事かを為すとき、熟慮断行して好結果を得たこともありましょう。反対に場当たり的な対応で辛酸をなめたこともあるのではないのでしょうか。

殊に人生の出発点ともいえる進学就職に際しては誰もが少なからず「そんなことより」別のことがしたいと悩んだりされたことでしょう。また人生の峠を超えて、下り坂を生きている私たちもまた心中に期するものがない人はないでしょう。

そんな時、「そんなことより」と、別口をたたく者があるかもしれない。それを聞いて自問自答することも必要なことです。

こうして自らの人生を汚すことなく過ごすことができれば、総理の「そんなことより」の失言と思える一言もそれはそれで納得のいく一言となります。

弘法大師のお言葉

「我れを益する銚を争い募つて、未だ己を損する劔を訪うに違あらず」(三教指帰卷上)

(自分の利益あることのみを争い求めて、己を損することのあることを思う余裕を持たない)



十月十四日から篠栗八十八か所巡拝。
六月に、寺報四百号発行。



◎平成二十六年甲午(キノエウマ)
四月 本堂新築に伴い本尊地下埋納の般若心経写経を檀信徒に依頼。

五月二日 移転地の造成宅地化工事完成。

十月二十八日 万徳院で高野山結縁行脚、広島支所より本尊引き継ぎ法要。

(平成二十七年開催の高野山ご開創千二百年を盛り上げるための法要。)

翌二十九日 奥之院消えずの法灯・撫で三鈷杵・飛行三鈷をモチーフにした金銅の三鈷杵をお迎えしての結縁行脚法要厳修。

この法要は千二百年前の高野山御開創のお大師様のご苦勞に思いを致しての法要で、移転事業がこうした時期に為される不思議な縁を感じないではありませんでした。

寺報には毎月、移転事業に協力いただいている方々のご芳名を列挙しています。

以上、寺報をめくりながら、宛ら我が人生の縮図を目にしているようでしたが、十年一昔と申しますが、十二年毎の午年を追ってみただけですが、当然のことながら、



青息吐息の現在の私とは別人の馬車馬のように、働いて×5いた時があったのだと思うと、元気な人を羨むこともなくなりません。

活力ある日々を過ごせたのは為さねばならない目標があったからにほかなりません。それはいうまでもなくお寺の復興である。

そう言いつつも様々なことをなしてきましたが、そのどれもが復興への道作りだったのだと今にして思うことですが、お寺とは無関係のことどもにも長くかかわりました。

選挙管理委員や保護司活動などがそれですが、それはそれで一人の人間としてお寺の住職としての私の足腰を鍛え、意識を深めることでもあったのだと思っています。そうした意味で人生に無駄道はないのだと確信します。

寺の復興は私一人で成し遂げられるものではありません。一人でひたすら頑張ってきたようにおもいますが、それは先代住職があつた戦時下から耕しつづけてきた法田があつたから可能だったのです。

当初は災害にも思い努力も報われない歳月であつたことは容易に想像できます。亡父の血豆を作つての日々の荒地の開墾なくしては私の第一歩ありません。

私の我武者羅な振る舞いも先代の作つた舞台があつたればこそです。だが、若かりし頃はそれがわからないのです。否、まったくわからないのではなく、分かつてはいてもわからない素振りです。それが若者たる所以でありましょう。

こうした宗門の枠外のことを経験して、その後は宗門の宗会議員選出。宗内著名寺院の住職に伍して任期を全うできたのも、宗門外の道を歩んだ経験も歴史ある寺々の住職に臆することなく対峙することができたのではないかとおもっています。

続いて山口支所長在任中にお寺の移転にとりくむ事態となりましたが、支所内は言うに及ばず、本山もお寺の内情をよく理解されて何の問題もなく事業が進捗したことは有り難いことでした。

その移り住んだ通津の地は、選挙管理委員の二十年間あらゆる選挙で度々投票所を駆け巡っていました。それは通津支所・本呂尾自治会館・長野の通津小分校などです。

本呂尾自治会館に隣接して観音堂・地藏堂があり、毎年八月には施餓鬼をつとめさせていただいていますし、通津の地も全く無縁の土地ではありませんでした。

足の悪い私と違って家内は毎夕、一万歩を目標に散歩していますが、野菜を頂いて帰ることもあり、終先日にはわか雨に足を速めていると後ろから傘を持って追いかけて傘を貸してくださいさる方もあり、心優しい人たちの住まわれる通津の地に寺地を定めることができたことを喜ばないではありません。

その通津の地への移転に際しての檀信徒のご協力に感謝する法要を五月十八日に営むことができたことは、我が人生の一区切りであった。

これからの日々は余生として、人に迷惑をかけることなく肩の力を抜いて気楽に過ごしたい。

誰かが言っていました。「人は年をとったと思つた時に年をとる」と。家内には常々、年齢のことは言わないように：」と、厳命されているのですが、何もかもが満足に出来なくなつて、気も弱くなり年齢を口にするのです。

それでもまだできることがある。身の回りのことがそれですし、読経は葬儀の際には良い声ですと、ほめられることもあります。お世辞半分としても自信にはなりません。

つまり、まだ万徳院の手を借りながらも檀務や年中行事に支障がでないということ。加えてこの寺報の作成が、ボケ防止ともなり出来ることなら七百号に到達できればと月々孤軍奮闘しています。

こうして父母の齢に近づいていますが、親の歩んだ大師信仰の道を辿るのみで追い越すことはありません。両親の辛苦を思えばの話である。

私の身のまわりは物であふれています。この身辺整理は今の私には不可能で、若い者の仕事として残しておくことになりなす。親の辿った信仰のみちの片鱗でも受け止めてくれればということ。最後に大師様のお言葉をもってこの稿を終えましょう。

心馬に鞭打って

心馬…心の奔放さを馬に喩える

八極に馳せ

八極…四方八方の極

意車に油さして

意車…心を車に喩える

もつて九空に戯る

九空…八方と中央の空

(三教指帰巻中)

ヒ 人の世で
ノ 望む榮華は
エ 絵空ごと
ウ 有為の奥山
マ 迷いつ超えん



(勝軍地藏尊…万徳院蔵)



高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経

六六〇

二卷奉納

岩国市装束町四丁目

福島 松代殿

二卷奉納

岩国市南岩国町二丁目

沖本あつ子殿

一卷奉納

岩国市通津

吉岡 律子殿

(十一月十一日～十二月十日奉納分)

凶命は一世に非ず一切は宿行に因る

その昔、舎衛国にバラモンの長者があり、財宝無量の
大長者でした。

その長者に二十歳になる息子がいました。良縁あつ
て結婚し、仲睦ましく互いに尊敬していました。

婦は言いました。

「樹林の園に行つて互いに楽しく語らい一日を過ごしま
せんか」と。

夫はそれを聞いて了解し、日を定めて園林に一日遊観
し楽しんでいました。その時、婦は樹上の花を指差して
欲しいと懇願するのです。

夫はそれは容易いことと木に登り一華を得るも、この
美しい華をたくさん婦に与えようと細い枝に足をかける
や、枝は折れて夫は地に落下し頭を打つて絶命したので
した。

長者の族らはこの事態を知り来たりて皆悲痛し悲哀せ
ざるはありませんでした。

誰も天を怨み咎めて言いました。

「天よ、どうして護つて下さらなかつたのですか」と。
葬を終えてもなお悲嘆し号泣は止むことがありません
でした。

仏はその愚を憐愍され、長者の家に至られ、告げられ
ました。

「長者よ、心を静めて良く聴け。万物は無常なり、久し
く保つことを得ること難し。生まるれば即ち死あり。罪
福それを追う。その故にいかに哭泣し懊悩するも如何と
もし難し。因縁をもつて子となり親となるなり」と。

仏は重ねて偈を説かれました。

命は華果の落ちるが如し、常に零落するをおそるべし
既に生まるればみな苦あり、誰か不死なる者ありや
淫によりて受胎し、生を享けるも命は電の如し
昼夜に無常の風吹き流れ、その身、死物となれり
魂は形あることなし、たとい死するも後に生ず
命は一世には非ず 愛癡に従い久しく流し
自ら為し苦樂を受け 身死するも魂は喪わず

長者はこれを聞いて意解け憂いを忘れる。合掌して仏
に問いました。

「我子はどのような罪を為して若くして亡ぜることとな
つたのですか」と。

仏は偈をもつて告げられました。

「その昔、三人の小兒あり、弓箭をもつて神の樹林に入
り樹上に雀を見付け、これを射止めたものが我等の優兒
とならんと、一斉に弓を射たのでした。

矢は雀にあたり死んで地に墮ちました。三人は共に笑
い歓喜したのでした。

その後、彼らは幾多の生死を繰り返し、何れも雀を殺
した罪を受けたのでした。長者の子もその一人なり。樹
木より落ちて死ぬ宿命あり。一切は宿行に因る。種は木
の像にしたがうが如く自然の報いは影の如し」と。

長者はこの偈を聞いて兒の宿命を知り、欣然として起
ち仏に申しました。

「願わくは我等仏弟子となり
五戒を受けて優婆塞（在家信者）
とならん」と。

佛は戒を授けて重ねて無常の
義を説かれたのでした。

（法句譬喻經卷第四・三十七）



あとがき

乙巳年も残すところ数日となりました。年男の私にとって今生最後の巳年だとの思いがあり感無量のものがあります。

炎暑の夏がウソのような寒い冬がやってきました。空気が乾燥し暖房器具の登場となりますが、火の元には注意の上にも注意を…。

一八二棟が焼失した大分の火災では犠牲者が一人であったのは奇跡的なことでした。香港の高層マンション火災では一五〇余人も亡くなりました。

火災とは異なりますが、東南アジアの国々では豪雨災害で一四〇〇人も犠牲となられたといわれています。

命も家屋財産も無常の存在であることを知らしめて余りあることですが、かける言葉もありません。

終わり良ければ総て良しと申しますが、高市総理の発言の言葉尻を捕らえたことに端を発する、中国の我が国への対応は大人げない嫌がらせにみえますが、収まる気配はなくこのところ自衛隊機へのレーダー照射など、危うい領域に入りつつあるように見えるのはいただけません。一年の終わりに注意信号が点滅するようでは新年を寿ぐことはできません。一日も早い終息を…。

この一年、檀信徒をはじめ幾多の方々々に御厚情を賜りましたことを、年の終わりに心から感謝申しあげます。良き新春をお迎え下さいますように。

発行者

高野山真言宗

寶池山 龍門寺

吉岡光昭



太陽を

神とぞ仰ぐ

曰天子

五頭の馬牽く

車に乗りて



人の世の

闇を除きて

幸やぞく

日々に見守る

頼もしき神



岩国市通津3634番地3 〒740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

電話 岩国(0827)38-4611